

クラスの男の子のおちんちんに点数をつける謎の少女の話

3年E組の教室は、昼休みのチャイムが鳴ると同時に異様な活気に包まれた。窓から差し込む陽光が教室の床にまだら模様を描き、机や椅子の金属がカチャカチャと音を立てる中、生徒たちは一斉に動き出す。だが、このクラスの中には、いつも決まった光景が広がっていた。クラスの一部、窓際の3番目の席に座る木島愛梨の周りに、男子たちがゾロゾロと集まってくるのだ。

木島愛梨は、ショートカットの栗色の髪が肩に少しだけかかる、明るくて人懐っこい女の子だ。くりっとした大きな目は好奇心に満ち、頬にはうっすらとそばかすが浮かんでいる。制服のブレザーを少しルーズに着崩し、スカートの下から覗く膝小僧が健康的

で、いつもニコニコしている彼女は、クラスでも人気者だった。だが、愛梨には他の女子とは一線を画す趣味があった。それは、「おちんちんが大好き」であること。そして、クラスの男子のおちんちんを見て、100点満点で採点することだ。

この奇妙な習慣は、ある日の放課後、愛梨が何気なく男子の翔太に「おちんちんって人によって全然違うよね。見てみたいなあ」と呟いたことから始まった。最初は冗談半分だったが、翔太が「じゃあ、見るか？」とパンツを下ろして見せた瞬間、愛梨の目がキラキラと輝き、「すごい！太くてカッコいい！80点くらいかな！」と即座に点数をつけたのだ。それ以来、愛梨の「おちんちん採点」がクラスの男子の間で話題になり、休み時間になると愛梨の席に集まって自分の「おちんちん」に点数をつけてもらうのが恒例行事と化した。

愛梨は机の上にちょこんと座り、足をブラブラさせながら、手には小さなノートとボールペンを持っていた。ノートには、これまで採点した男子のおちんちんの記録がびっしりと書かれている。名前、日付、点数、そして簡単なコメント欄があり、まるで美術品の鑑定書のように細かく記入されていた。彼女の採点基準は明確ではないが、形、大きさ、色、バランス、そして「愛梨の直感」が重要な要素らしい。男子たちはそれを真剣に受け止め、愛梨の点数を競うようになった。